

能動・受動の選択の複数の独立した有標性制約によるモデル

TOET RUDY

直接ニ受動文とそれに対応する能動文のうち、話し手がどのような仕組みを通じてどちらか一方を選ぶかについて考察し、調和文法(Harmonic Grammar; 最適性理論の前身)という理論枠組みを用いてその選択のモデルを提示する。まず、先行研究の基づいて、能動・受動の選択が少なくとも参加者の有情性、主題性、独立存在性、人称、指示性の五つと相関すると述べる。すなわち、有情物、高主題性のもの、文の表す事象と独立して存在するもの、一人称のもの、高指示性のものが主語に、そして非情物、低主題性のもの、文の表す事象以前には存在しなかったもの、三人称のもの、低指示性のものが非主語になる態が選ばれる傾向があるのである。次に、能動・受動の選択は「共感度」や「談話関連性」のような一つの概念に支配され、以上の五つの参加者属性はその概念と相関するに過ぎないとする還元的仮説の可能性について考える。つまり、参加者属性と能動・受動の選択との相関関係はそのような概念を介した間接的なものに過ぎないとする仮説である。主に英語の与格交替および属格交替における類似現象を中心とした汎言語的根拠を挙げ、五つの参加者属性がそれぞれ独立した要因として態の選択に直接影響を及ぼすという捉え方が妥当であると主張する。最後に、これらの参加者属性が能動・受動の選択を有標性階層から派生する有標性制約として左右するモデルを提示する。最適性理論の枠組みを採用した先行研究を手本にするが、標準最適性理論の基本原則の一つである、制約順序が厳格的な支配関係を表すという原理は受け入れない。その代わりに、制約それぞれに実数の加重値が付与されることが基本原則である調和文法が適切な枠組みであると主張し、いくつかの入力に対する出力候補評価の例を示す。